九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

金原理著『平安朝漢詩文の研究』，後藤昭雄著『平安朝漢文学論考』

工藤，重矩
福岡教育大学助教授

https://doi.org/10.15017/12038

出版情報：語文研究. 54, pp.42-45, 1982-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

金原　理著『平安朝漢詩文の研究』
後藤昭雄著『平安朝漢文学論考』

工藤重矩

平安朝漢文学の研究は、近年ようやく盛んになりつつあるが、和歌・物語に比すれば、まことに寥々たるものである。平安時代においては漢文学こそが第一文芸だったことを考えれば、もっと盛んであるべき分野なのだが、研究者の数は少い。少いとはいえ、近代以降の研究史にもいくつかの峰があり、そして次の峰がこの両氏によって形成されるであろうと予想される、その金原理・後藤昭雄両氏の最初の論文集が相次いで刊行された。両書の内容は広く深い。充分な紹介とはとてもなりそうにないことを、あらかじめ申しておかねばならない。

○

金原理氏『平安朝漢詩文の研究』は十八篇の論文からなり、「勅撰集の世界」「貞観延喜の時代」「天暦期以後」「中世の曙」の四つの章に構成されている。章を追って紹介してゆこう。

第一章は平安初期の三勅撰詩集時代の研究である。「嵯峨朝文壇の基調」は、三詩集を生み出した嵯峨天皇とその周辺の詩人たちの経国的詩観とその具体的表現であるはずの実作とが、必ずしも一致していないことを指摘する。この章の総論にあたる論文である。嵯峨天皇という巨星をとりまきめぐる諸詩人の考察として、「国風暗黒時代文学の位相――空海と勅撰集」は、僧侶空海の作品が勅撰集に収められていることの意味を天皇と空海の親密な結び付きに求め、空海の作詩の技法の特徴を明らかにしている。

「賀陽豐年小伝」「小野岑守考」「巨勢識人考」「滋野貞主考」は標題の詩人の伝記的研究で、いずれも資料を博く尋ねた実証的な論文であり、これによって初めて本格的な伝記が備わった。その点はもとより最も顕著な功績であるが、金原氏の詩人伝の特徴は、歴史的事実の解明とともに、常に表現論的視点が備わっていることで、それは伝記研究にその人の作品を利用するという域を越えて詩そのものの特質の解明に及ぶ。

第二章「貞観延喜の時代」は嶋田忠臣と菅原道真とを中心とする研究である。嶋田忠臣は「嶋田忠臣伝考」（昭40）以来最も長く深

く考察された対象である。「嶋田氏の系譜」は、忠臣に至るまでの嶋田氏の諸々の人物について諸史料の片々を、丹念に継ぎ合せての系譜作成である。「『田氏家集』の諸本」は松平文庫を中心とする伝本研究で、諸伝本の中では松平本が最も良いとする。「嶋田忠臣と白詩」「軟脚考」は、忠臣における白居易の影響、影響というよりは利用の仕方についての考察である。利用法を、一、特定の作品との詩句の類似　二、詩句の類似はないが、特定の作品の影響下に成るもの　三、白詩に独特な詩語（白詩語）を使用するもの　この三段階に分けて影響の深浅を論じている。この測定法は日漢の比較だけでなく、和歌・物語における影響関係（本歌取などを含めて）にも適用できそうである。より精密化が期待される。

「延喜前後の漢詩人の方法―嶋田忠臣の場合―」は当時の詩人の中国関係の知識の源としての類書『芸文類聚』『初学記』等の利用の実態の考察である。類書と原書（例えば『漢書』）に同じ文章がある場合、日本の詩人ははたしてどちらを直接の典拠としているかということは、甚だ微妙でやっかいな問題である。金原氏は、一首の詩における数種の引用の典故が、類書の近接した部分に存する例のしばしばあることを指摘して、類書の利用の方が一般的であったであろうとする。この論文は著者の研究方法の傾向の一つの極であろう。この章には今一篇「菅原道真の漢詩」があり、道真における五言詩の意味を論じている。

第三章「天暦期以後」は三篇。「松平文庫本『千載佳句』について」は該書の書誌的研究であり、著者の第一論文（昭39）でもある。「平安時代漢詩人の規範意識」は省試における詩の及落判定に関して、大江匡衡と紀斉名との詩病についての論争をとりあげ、平安中後期の詩論の認識と実態を述べたもの。韻律のこと、詩病のことは、当時の代表的詩人の間にさえかく論争を生ずるほどに難しい分野であるが、そのところを、金原氏は一字一字の平仄を明示しつつ問題点を整理し解きほぐしてゆく。このような論文を書ける研究者は、日本漢文を論ずる者の中では稀である。韻律の面を甚だ精密に論述するのは、この論文のみならず、この著書全体を通じての大きな特徴であり、他の追随を許さない部分である。「紀斉名論」は、前記論争の一方匡衡の息男匡房の斉名に対する評価を媒介として、斉名の文体の特質について述べる。

第四章「中世の曙」は「『泥之草再新』管見――祐徳神社蔵『教家集句』の紹介をかねて――」「『文筆問答鈔』について」の二篇で標題の書の伝本・内容に関する基礎的研究である。

○

後藤昭雄氏『平安朝漢文学論考』は、長短二十四篇の論文を「嵯峨朝詩壇」「菅原道真とその時代」「一条朝前後」「詩人伝研究」の四つのまとまりに分類して構成される。順を追って紹介しよう。

「嵯峨天皇と弘仁期詩壇」は、勅撰三詩集における嵯峨天皇の詩賦の素材の変化をたどり、天皇の文学観が各々の詩集の性格を規定したことを述べ、弘仁期における嵯峨天皇の役割の大きかったことを指摘する。「文華秀麗集の位置」は、上述の視点から、最も嵯峨天皇色の強い集であることを「君臣唱和」の文学様態と関連させて説く。

「宮廷詩人と律令官人――嵯峨朝文壇の基盤――」は、官人にして詩人という存在形態が嵯峨朝の一般的なあり方で、文章経国の理念とも深く関わっていて、この二面性は、詩文の表現にも反映して

いることを論じている。後藤氏の王朝詩人についての認識の基本が最も鮮明にうかがえる論文である。「小野岑守小論」はそのような二面性をもつ詩人としての具体的な論及である。

この章、今一篇の「嵯峨朝詩人の表現—文学空間の創造—」は、この時代の詩に日本の地を中国の地に擬することが多いことを述べそのような文学的想像力をもたらした要因として、嵯峨朝という唐風憧憬の時代性を考慮すべきことを論ずる。

「菅原道真とその時代」としてまとめられるのは七篇。「文人相軽」文帝の典論論文の一句を標題としたこの論文は、この時代の文人学者の社会を学儒派と詩人派との分争の時代としてとらえ、道真達詩人派の意識を解明する。後藤氏の時代把握が最も端的に示され以下幾篇かの論を導くものとなっている。

「大江音人—在朝の通儒—」は、音人を実務型文人官僚としてとらえ、詩人型である菅原是善などと比較しつつ、後の道真時代での詩人派と学儒派の対立の先蹤とする。「忠臣・道真・長谷雄」は、この三人を詩人派と規定し、三人に儒者に対しての詩人という自覚があったことを述べている。「藤原佐世」は藤原氏最初の文章博士である佐世と道真とは縁戚関係もあり、従来言われているほど対立的仲ではないこと、しかし詩人としては許していないことを論ずる。「大蔵善行七十賀詩宴について」は、この宴に参加した人々を従来は善行閥と考えていたが、その詩句の分析を通して、彼等は善行の学閥的弟子ではなく、善行閥というものも存在しなかったことを論証している。

「菅原道真の『近院山水障子詩』をめぐって」は、障子詩に用いられた「行路難」の語を取りあげ、表現面からは白詩語の受容であることを、詩壇的側面からは儒家派との対立を、題画詩史の面からはこれに述懐詩的性格があることを論ずる。一語の分析をかく多方面に展開させて読者を瞠目させる。「紀長谷雄の『山家秋歌』について」も、標題の詩八首を屏風詩とみなし、その詩には作者の私的心情が反映している述懐詩的性格を持つ題画詩であることを証し、道真との類同性を指摘する。

「一条朝前後」としてまとめられるのは五篇。「桜島忠信落書について」は、落書に描かれる左右大臣を実頼と師輔に比定すべきことの考証。著者の最初の（昭42）論文である。「一条朝詩壇と『本朝麗藻』」高階積善が編集した本朝麗藻には伊周や以言など積善と近しい詩人の作品が多く採られていて、必ずしも一条朝の詩人分布の平均的反映ではなく、編者の私的感情が反映していることを論ずる。一条朝詩壇の綿密な調査による明晰な論。「大江以言考」は、大江家の傍流ではあるが『本朝麗藻』等に活躍した以言の伝記的考察である。

「大江匡衡の詩文」は、その類型的表現、同一典故の多用、対句表現の不整などのマイナス面の指摘による表現能力の考察。「大江匡房の『暮年詩記』について」は、細かく注を施すことを通して、匡房の文学的伝記の一部を明らかにしようとしており、かつ「暮年詩記」が「延喜以後詩序」に倣って虚構化された作品であることを論ずる。

「詩人伝研究」の部には「『文華秀麗集詩人小伝』拾遺」「古今集歌人における詩人的要素」「属文の王卿—醍醐系皇親—」「漢文学史上の親王」「白河院の詩遊」「敦道親王」「学生の字について」の七篇がある。これらはいずれも資料を博く求め、実証に徹した研

究であるが、それは「平安朝における詩人層の広範さの再確認」の意図によっている。我々はこの諸論文によって、意外な人々が詩人であったことを確認し、また認識を改めさせられた事柄は多いのである。

○

両著を併せ読んでまず感じることは、二書ともに徹底した実証的方法に従っていて浮薄な部分が全く無く、しかも達意の文章によって事実が次々と明らかにされてゆくことからもたらされる、知的な快さである。「文理倶高」という語を思い浮べてもあながちなことでもないであろう。

そのような特長を共通に備えつつも、おのずから両著にはそれぞれの面目が存する。金原氏の著書は、詩語・影響関係・作詩法・韻律のことなど、詩文の表現そのものの究明により多くの力が注がれている。伝本研究の四篇も広くはその延長線上にあると言ってよいであろう。研究史的にいえば、小島憲之博士の詩語研究の系譜に多く属するといえようか。

後藤氏のは、作家の問題・史的研究により多くの筆がついやされている。歴史的知識を駆使しての詩壇史的研究は、平安漢文学史に一つの明確な視点を提出した。嵯峨朝における一人の中の詩人官人併存のこと、貞観延喜期の詩人派学儒派の対立のことなどは、今後の研究に墨縄の役割を果すであろう。

違いを強調すればそのように言えるけれど、後藤氏の注釈的つまりは表現的側面から史的側面へと展開する「近院山水障子詩」「暮年詩記」等の論の方法はすばらしいものであるし、金原氏の一連の詩人伝研究は、表現研究と連環してまことの詩人研究であり、江村北海「日本詩史」の「詩を論じて以て人に及ぼす」という態度に連なるものである。ともに一つの側面にのみ固定されない幅広さがあることは、やはり強調すべき特徴である。

このような両氏の著書を前にして、平安漢文学の研究が確実に新しい段階に入りつつあることを実感するのであり（例えば、現在の教科書ともいえる川口久雄氏の『平安朝日本漢文学史の研究』と読み比べてみれば、金原・後藤氏の研究対象となった分野について、いかに多くの新しい知識が加えられ深められたかが分るであろう）、文学史というものが、例えば小島憲之博士等の事実に徹した研究に依っていやおうなしに書き改められ、それは平安漢文学のみならず和歌研究への影響も甚大であったことを想起すれば、両氏のこの漢文学における着実な研究は、和文学を含めての平安文学史への認識の改変をもたらすことに、必ずやなるであろう。その意味でも、和文学の側も両氏の研究を正当に受けとめ位置付けなければならないのであろうと思う。

『平安朝漢詩文の研究』　昭和五六年十月　九州大学出版会
六〇〇〇円

『平安朝漢文学論考』　昭和五六年九月　桜楓社　一三八〇〇円